

西洋中世の動物を巡る思想と言説



本研究は13世紀を中心とし、その前後の時代を射程に入れながら、西欧中世における人と動物の関係を探るものです。中世における動物論的転回が起きたともされる同時代について、二つの観点からアプローチしています。第一には表象の領域で、文学や写本挿絵における動物を巡る表現を扱っています。第二には言説の領域で、現実における人と動物との関わりや、同時代における動物を巡る規範や理論を扱っています。両者を統合することで、人間中心主義的と一般化されがちな中世の動物観について分析し、学際的にその特徴と意義を明らかにすることを目指しています。

本シンポジウムは、本研究の二年目の締めくくりとして、思想班・言説班のメンバーを中心に、古代ギリシア・ローマ思想をご専門とされている金澤修氏をゲストにお呼びして、第二年度の研究報告をするものです。それぞれの研究の進捗状況を報告した後、本研究プロジェクトにおける表象班のメンバー、会場の参加者と討論を行います。

プログラム

主催者挨拶

金澤修 (東京都立大学) 「オルタナティブとしてのミツバチ、フリンジ (周辺) としてのイヌアリストテレスの「ポリスの動物」とロゴス機能をめぐって」

山口雅広 (龍谷大学) 「人間と動物のあいだ——アルベルトゥス・マグヌスの動物論における境界の規準と多層化——」

頼順子 (佛教大学) 「13~14世紀フランスの史書と動物——ヴァンサン・ド・ボーヴェ『歴史の鑑』と『フランス大年代記』を例に——」

全体討論

2026年3月25日 (水) 13:15~17:15 (開場12:45)

龍谷大学大宮キャンパス東覺301教室

入場無料・要事前登録



登録はこちらから↑

主催：科学研究費基盤研究(C)「13世紀前後の西欧における人、動物、動物表象の関係性を巡る学際的研究」(課題番号：24K03801) 思想・言説班/連絡先：medievalanimals2026@gmail.com (代表・山口雅広)